

高等学 校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	4
V	研究の内容	5
VI	研究の成果	23
VII	今後の課題	23

研究主題	地理的な見方・考え方及び歴史的な見方・考え方を働かせ、知識を活用するための学びの過程を重視した授業改善と学習評価の充実
------	--

I 研究主題設定の理由

本研究では、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 平成 28 年 12 月 21 日）（以下、「答申」と表記。）、平成 30 年 3 月に告示された新学習指導要領及び同年 7 月に告示された新学習指導要領解説、教育研究員高等学校地理歴史部会の先行研究を踏まえ、研究主題を設定した。

現行学習指導要領の成果と課題について、答申では「社会科、地理歴史科、公民科においては、社会的な事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させること等に重点を置いて、改善が目指されてきた。一方で、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的な事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されている。また、社会的な見方や考え方については、その全体像が不明確であり、それを養うための具体策が定着するには至っていないことや、近現代に関する学習の定着状況が低い傾向にあること、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと等も指摘されている。」と示されている。

今回の学習指導要領の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるよう、全ての教科等の目標及び内容が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理された。

これらを踏まえて、本部会では、「これからの時代に求められる地理歴史科における『資質・能力』」について、新学習指導要領が示す「目標」を基にして、次のとおりまとめた。

【資質・能力】

- 1 現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能
- 2 地理や歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力
- 3 地理や歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度
- 4 空間軸や時間軸から多面的・多角的な考察や深い理解を通して、自国や他国の文化を尊重することの大切さを自覚すること

また、現状については、答申に示された現行学習指導要領の課題である「資料から読み取った情報を基にして社会的な事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角

的に考察したりして表現する力の育成が不十分であること」、「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと」という部分や、各研究員による授業実践を踏まえて、次のとおりまとめた。

- 1 習得した知識を活用して、社会的事象の位置や空間的な広がりに着目したり、類似・差異、因果関係などを表現したりする活動が十分でない。
- 2 授業の中で、生徒自身が主体的に問いを生み出すような仕掛けが十分でない。
- 3 学習内容に対して、生徒自ら史資料を探したり、作成するといった活動が十分でない。

これらの現状を踏まえて、地理歴史科の指導における課題としては、「生徒自身が学習した内容を活用する取組が不十分であること」や、「授業者によって提示された単元を貫く大きな問いに対し、社会に見られる課題や身近な事象と結び付けて考えさせ、主体的に新たな問いを生み出す力を育む必要があること」、「ループリックを事前に提示することで、生徒自身が学習の到達点を把握できるようにして、史資料をより深く活用させるとともに、生徒が自ら工夫した史資料を追究させて、学習に対する姿勢・態度が鍛える必要があること」と考えた。

以上のことから、次のとおり課題をまとめた。

- 1 新たに習得した知識と既習事項とを結び付けて活用し、社会的事象の位置や空間的な広がりに着目したり、類似・差異、因果関係などを表現したりする活動を増やす必要がある。
- 2 生徒が主体的に問いを生み出すような仕掛けを授業の中に取り入れる必要がある。
- 3 自らの力で、史資料を探したり、作成したりする機会を増やす必要がある。

研究主題については、答申において示された地理歴史科における「社会的な見方・考え方」を取り入れた。「社会的な見方・考え方」について、地理領域科目では「社会的事象の地理的な見方・考え方として、「社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなど、地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付け」、歴史領域科目では「社会的事象の歴史的な見方・考え方」として、「社会的事象を、時期や推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりし」て働かせるものとされている。

以上のことから、本部会の研究主題を「地理的・歴史的な見方・考え方を働かせ、知識を活用するための学びの過程を重視した授業改善と学習評価の充実」と設定した。

Ⅱ 研究の視点

Iで設定した研究主題に基づく研究の視点は3点である。

1 知識を活用すること

生徒は個々の知識についての理解や習得ができていますが、それらを用いて事象の因果関係などを話し合い活動の中で表現することに課題がある。学びの過程の中で学習内容と既習事項とを関連付ける機会を取り入れることで、事象を概念化し、因果関係などについて表現することができるになると仮定し、話し合い活動や学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付ける活動の場면을多く取り入れることとした。

2 社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと

新学習指導要領では「地理や歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決する態度を養う」ことが目標として設定されている。授業者の問いをきっかけに、生徒自身が社会と結び付けて、新たに問いを生みだし、よりよい社会の実現に向け主体的に課題を追究する仕掛けを学習活動に盛り込むこととした。

3 史資料のより深い活用を図ること

平成 29 年度教育研究員地理歴史部会報告書においても取り入れられている「時間軸・空間軸を重視するとともに複数の史資料を活用した多面的・多角的な考察を促す学習指導」を行う。また、本研究においては、生徒自らが探し出した史資料を活用して、発言などをする際の根拠となるものを作成したりする学習活動を取り入れた。

生徒の変容を把握するために、地理歴史科の授業において、平成 29 年度教育研究員地理歴史部会報告書を参考にして、汎用的に使用することができるルーブリックを作成した。（表 1）

生徒の対話的な活動や、文章にまとめた成果物、史資料を活用した成果物を、表 1 のルーブリックを活用して評価し、仮説を検証することとした。

表 1 各科目共通のルーブリック

評価項目	評価基準 A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
ルーブリック 1 「知識を活用すること」	知識を活用する（既習事項と関連付ける）ことができている。	知識の活用までは至らないが理解はできている。	習得すべき知識について一部だけ理解できている。	習得すべき知識についてほとんど理解できていない。
ルーブリック 2 「社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」	問いに対し、社会的事象を位置などに着目して捉えるとともに、類似・差異、因果関係などを表現した上で問いを生みだしている。	問いに対し、類似・差異、因果関係などを表現した上で問いを生みだしている。	問いに対し、類似・差異、因果関係などを一部だけ表現できている。	問いに対し、類似・差異、因果関係などをほとんど表現できていない。
ルーブリック 3 「史資料のより深い活用を図ること」	新たな史資料を探したり要約したりして、新たな資料を作り出すことができている。	提示された史資料から必要な情報を探したり、要約したりすることができている。	史資料の読み取りが一部だけできている。	史資料の読み取りがほとんどできていない。

Ⅲ 研究仮説

「Ⅱ 研究の視点」の「1 知識を活用すること」を踏まえて、学びの過程の中で学習内容と既習事項とを関連付ける機会を取り入れることで、事象を概念化し、因果関係などについて表現することができるようになると仮定して、次のような仮説 1 を立てた。

仮説 1

学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項とを関連付けた話し合い活動を取り入れるこ

とにより、生徒は事象を概念化し、因果関係などについて、表現することができるようになるだろう。

また、「2 社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」を踏まえて、授業者の問いをきっかけに、生徒自身が社会と結び付けて、新たに問いを生みだし、よりよい社会の実現に向け主体的に課題を追究すると仮定して、次のような仮説2を立てた。

仮説2

学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより、生徒はよりよい社会の実現に向けて、課題を主体的に追究することができるようになるだろう。

さらに、「3 史資料のより深い活用を図ること」を踏まえて、生徒自らがルーブリックを参考に史資料を活用して、発言などをする際の根拠となるものを作成したりする学習活動を取り入れることにより、意欲的に課題を解決する姿勢や態度を育成することができると仮定して、次のような仮説3を立てた。

仮説3

ルーブリックを事前に提示することによって、生徒は学びの見通しを立てた上で、史資料をより深く活用することができるようになり、学習に対する意欲を高めるようになるだろう。

IV 研究方法

1 具体的方策

以下の3点を取り入れて、授業改善と学習評価の充実を図り、成果と課題をまとめる。

- 1 授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けさせる場面を含んだ話し合い活動を取り入れる。
- 2 「単元を貫く大きな問い」に対し、社会において見られる課題と結び付けて考えさせる活動を取り入れる。
- 3 事前にルーブリックを提示し照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。

2 検証方法

仮説を検証するため、具体的方策を踏まえ指導案を作成して一つの単元を通じて授業改善を行い、その前後で生徒がどのように変容したかを比較し、検証を行う。

- 1 話し合い活動に対して、ルーブリック評価や、生徒による自己評価を実施して検証する。
- 2 文章などにまとめた成果物に対して、ルーブリック評価と生徒の自己評価とを組み合わせで検証する。
- 3 史資料を活用した成果物に対して、事前に提示したルーブリックを活用して検証するとともに、自己評価の記入内容から、生徒の学習意欲の変容について検証する。

V 研究の内容

研究構想図

全体テーマ『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

- 1 現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能
- 2 地理や歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力
- 3 地理や歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度
- 4 空間軸や時間軸から多面的・多角的な考察や深い理解を通して、自国や他国の文化を尊重することの大切さを自覚すること

高校部会テーマにおける現状と課題

- 現状**
- 1 習得した知識を活用して、社会的事象の位置や空間的な広がりに着目したり、類似・差異、因果関係などを表現したりする活動が十分でない。
 - 2 授業の中で、生徒自身が主体的に問いを生み出すような仕掛けが十分でない。
 - 3 学習内容に対して、生徒自ら史資料を探したり、作成するといった活動が十分でない。
- 課題**
- 1 新たに習得した知識と既習事項とを結び付けて活用し、社会的事象の位置や空間的な広がりに着目したり、類似・差異、因果関係などを表現したりする活動を増やす必要がある。
 - 2 生徒が主体的に問いを生み出すような仕掛けを授業の中に取り入れる必要がある。
 - 3 自らの力で、史資料を探したり、作成したりする機会を増やす必要がある。

高等学校地理歴史部会主題

地理的な見方・考え方及び歴史的な見方・考え方を働かせ、知識を活用するための学びの過程を重視した授業改善と学習評価の充実

仮説

- 1 学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項とを関連付けた話し合い活動を取り入れることにより、生徒は事象を概念化し、因果関係などについて、表現することができるようになるだろう。
- 2 学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより、生徒はよりよい社会の実現に向けて、課題を主体的に追究することができるようになるだろう。
- 3 ルーブリックを事前に提示することによって、生徒は学びの見通しを立てた上で、史資料をより深く活用することができるようになり、学習に対する意欲を高めるようになるだろう。

具体的方策

- 1 授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けさせる場面を含んだ話し合い活動を取り入れる。
- 2 「単元を貫く大きな問い」に対し、社会において見られる課題と結び付けて考えさせる活動を取り入れる。
- 3 事前にルーブリックを提示し照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。

検証方法

- 1 話し合い活動に対して、ルーブリック評価や、生徒による自己評価を実施して検証する。
- 2 文章などにまとめた成果物に対して、ルーブリック評価と生徒の自己評価とを組み合わせ検証する。
- 3 史資料を活用した成果物に対して、事前に提示したルーブリックを活用して検証するとともに、自己評価の記入内容から、生徒の学習意欲の変容について検証する。

2 実践事例Ⅰ 世界史

教科名	地理歴史	科目名	世界史A	学年	第1～4年次
-----	------	-----	------	----	--------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

ア 単元名 オリент世界の統一

イ 使用教材 「新版 世界史A 新訂版」(実教出版)

(2) 単元(題材)の指導目標

オリент文明が生まれた理由について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら理解し、王権や神々への考え方を考察することができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
オリентで文明が生まれた理由について理解し、その知識を身に付けている。	オリентで文明が生まれた理由について、多面的・多角的に考察し、表現している。	オリентで文明が生まれた理由について、意欲的に追究している。

(4) 単元指導計画と評価計画 (2時間扱い)

時間	学習内容・学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【ねらい】教科書の写真や地図から、オリентで文明が誕生した理由について考察させる。				
	【単元を貫く大きな問い】オリентで文明がどのように誕生し、世界の歴史や各地域にどのような影響を与えたか。				
	【具体的方策3】ループリックに照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。				
第1時	<p>【授業を展開するための問い】<u>オリентの特徴は何か。</u></p> <p>①ワークシートに示されたループリックについて確認する。</p> <p>②教科書を参考にメソポタミア文明、エジプト文明の内容を理解する。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>古バビロニア王国はどのような国だったのか。</u></p> <p>③古バビロニア王国について、教科書本文と写真から理解する。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>古バビロニア王国はなぜ滅びたのか。</u></p> <p>④教科書の写真から考察する。</p>		●		<ul style="list-style-type: none"> ・西アジアと地中海沿岸の地域的な特色を理解し、その知識を身に付けている。(ワークシート、活動観察) ・ヒッタイトが高度な技術をもっていたことを多面的・多角的に考察している。(ワークシート)

第 2 時	【ねらい】 既習内容と関連付けながら、王権や神々への考え方を考察させる。		
	【本時の問い】 なぜオリエントが統一され、どのように文明が発展したのか。		
	【具体的方策1】 授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けて考察させる活動を取り入れる。		
	【授業を展開するための問い】 <u>現在のイランを含む地域ではどのような王朝が存在したか。</u>	●	・ゾロアスター教の内容を理解し、現在のイランではどのように信仰されているかを多面的・多角的に考察している。
	【授業を展開するための問い】 <u>現在のイランを含む地域ではどのような宗教が信仰されたか。</u>		
	① ワークシートに取り組み、ゾロアスター教について理解する。		
【授業を展開するための問い】 <u>オリエントではどのような王朝が存在し、どのような民族や王が支配したのか</u>			
② ワークシートに取り組み、王朝や民族について理解する。			
【具体的方策2】 「単元を貫く問い」に対し、社会において見られる課題と身近な事象とを結び付けて考えさせる活動を取り入れる。			
③ ワークシートに疑問に感じたことを記入する。			

(5) 本時(全2時間中の1時間目)

ア 本時の目標

西アジアの地理的条件や地域的特色を理解し、オリエントの各地（メソポタミア・エジプト）でいち早く文明が誕生し、その後西アジアにどのような王朝が存在したのか、王権や神々に対する考え方を現代に関連付けて多面的・多角的に考察することができるようにする。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 前單元では、他地域「南アジア（インド世界）」について、文明の誕生から仏教・ヒンドゥー教の成立、王朝の興亡とデリー＝スルタン朝まで（イスラーム化されたインド）を、流れを理解することに終始した。そこで本單元では、本時の学習内容「オリエント文明の誕生」を、既習事項「インダス文明や中国文明」と比較するなどの関連付けを取り入れた。このことを通して事象を概念化し、対話的な活動の中で表現することができるようにする。

(イ) 前單元では、「なぜ」を説明することにあまり重点を置かず、歴史上の出来事を確実に知識として身に付けることに重点を置いた。一方で、歴史的事象の関連性が見えづらく、生徒の興味関心を高めることが難しかった。「なぜ」という問いを重視し他地域との比較するなどによって新たな問いを引き出すことにより、よりよい社会の実現に向け課題を主体的に追究することができるようにする。

- (ウ) 前単元では、資料を読み取る活動は取り入れたが、本単元では、配布されたプリントに提示されていない史資料を教科書や資料集などから探したり要約したりして、新たな資料を作り出す活動を取り入れた。これにより、史資料をより深く活用できるようにして学習に対する意欲を高める。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	①単元を貫く大きな問い「なぜオリエントで文明が誕生し、各地にどのように影響したか」を確認する。	・本時のねらいを周知する。 また、グループワークを行うことを伝える。	
	【授業を展開するための問い】オリエントの位置を確認して、オリエントの地理的な特徴を考えてみよう。		
展開 35分	【授業を展開するための問い】古バビロニア王国はどのような国だったのか。		
	①「なぜメソポタミア文明、エジプト文明が誕生したのか」という本時の問いのうち、メソポタミアにおいて存在した古バビロニア王国はどのような国だったのかを個人で考察する。 【予想される生徒の反応】 ・ハンムラビ法典 ・ヒッタイトに滅ぼされた等	・教科書、資料集などを参考にするように伝える。 ・既習事項であるインドの王朝や中国の王朝などを参考にするように伝える。	・既習事項であるインドの王朝や中国の王朝など、他の地域と比較して、多面的・多角的に考察している。(ワークシート)
まとめ 10分	【授業を展開するための問い】古バビロニア王国はなぜ滅びたのか。		
	②古バビロニア王国が滅びた理由を個人で考察する。 ③グループに分かれて意見や考えをまとめる。 ④グループごとに意見や考えたことを発表する。 【予想される生徒の反応】 ・古バビロニア王国が弱かったから等		
まとめ 10分	①ワークシートに、単元を貫く問い「なぜオリエントで文明が誕生し、各地にどのように影響したか」について本時に学習した内容をふまえて解答を記入する。	・「現代との差異や類似はどうか」という問い掛けを行い、現代の国際問題と関連付けられるよう留意する。	・本時に学習した内容をもとに、新たな問いを追究している。(ワークシート)
	②ワークシート「疑問に思ったこと」に新たな問いを記入する。		

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

(7) 仮説1「学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項を関連付けた話し合い活動を取り入れることにより～になるだろう」については、表2より、学びの過程の中で地域的な特徴などについて話し合い活動を行うことによって学び合う状況が形成されて、約半数の生徒が類似・差異、因果関係などを表現することができたが、C・D段階の生徒へのフォローも必要である。

表2 ルーブリック1「知識を活用すること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	20%	30%	30%	20%

(4) 仮説2「学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより～になるだろう」については、表3より、約9割生徒が達成できたが授業の趣旨説明に時間を要し、個人で考察する時間を十分に確保することができなかつたため、戸惑う生徒も存在した。授業のねらいである「新たな問いを引き出し、よりよい社会の実現に向け課題を主体的に追究すること」については、事前に趣旨を分かりやすく図式化して生徒に提示すれば、十分に時間確保ができて実現できたと考える。

表3 ルーブリック2「社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	30%	60%	10%	0%

(5) 仮説3「ルーブリックを事前に提示することによって～になるだろう」については、授業の展開において、「古バビロニア王国はどのような国だったのか」という発問を行った。表4の結果より、解答を導くまでに時間が必要となったためC・D段階の生徒が40%という結果になった。活用する資料とヒントとなる語句を提示することによって解答を導くことができたが、今後、表現力を高める活動を継続することで時間を短縮することができる。

表4 ルーブリック3「史資料のより深い活用を図ること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	30%	30%	30%	10%

イ 成果と課題

(7) 成果

表2の結果より、新たな知識と既習事項とを関連付けて考察する活動を取り入れたことにより、生徒は類似・差異、因果関係などをワークシートに表現することができた。また、表3の結果より、提示された「単元を貫く大きな問い」に対し、現代の社会に見られる課題や身近な事象と結び付けて考えさせる活動を取り入れたことにより、歴史的な事象を理解しながら、現在の諸問題を意識することができた。

(4) 課題

表4の結果より、C・D段階の生徒が40%となったように新たな史資料を作り出す活動を授業に取り入れることが、授業進度の確保や授業準備の観点から難易度が高く、年間を通し

て計画的に行わなければ生徒の学習に対する意欲を高めることが難しい。年度当初から指導計画に組み込み、活動を継続することにより短時間で表現ができるようになると思う。

3 実践事例Ⅱ 日本史B

教科名	地理歴史	科目名	日本史B	学年	第2学年
-----	------	-----	------	----	------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

- ア 単元名 初期議会と日清戦争
 イ 使用教材 「詳説日本史B」山川出版社
 「新詳日本史」浜島書店
 「詳録新日本史史料集成」第一学習社

(2) 単元(題材)の指導目標

初期議会の推移や日清戦争などを基に、国際情勢に着目しながら諸資料を活用して、地理的・歴史的な見方・考え方を働かせて考察することができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
日本の初期議会での出来事や日清戦争に至るまでの背景について理解し、その知識を身に付けている。	日清戦争について、初期議会や朝鮮問題の出来事を背景に、多面的・多角的に考察し表現している。	本単元の授業時間の関係性を踏まえ、単元の問いや社会に見られる課題について意欲的に追究している。

(4) 単元指導計画と評価計画 (5時間扱い)

時間	学習内容・学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【単元を貫く大きな問い】あなたが当時の民党(吏党)の議員であったならば日清戦争について、どのように考えるか。				
第1時	【ねらい】明治時代の初期議会において政府が目指したものと民党の要望に注目させ、現在の議会との類似や差異などについて考察させる。				
	【本時の問い】明治時代の初期議会と現在の議会の違いは何だろうか。				
	【具体的方策2】「単元を貫く問い」に対し、社会において見られる課題や身近な事象とを結び付けて考えさせる活動を取り入れる。 【授業を展開するための問い】明治時代の初期議会の特徴とはどのようなものか。 ①初期議会における「蛮勇演説」を取り上げ、当時の民党の反応を紹介する。		●		・初期議会と現在の議会との類似や差異に着目し、現在の社会情勢に目を向ける。(活動観察)
第2時	【ねらい】既習事項と条約改正の関係について着目しながら考察させる。				
	【本時の問い】条約改正とは結局はどういうことなのかこれまでの学習を踏まえて考えなさい。				

	<p>【具体的方策1】授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けて考察させる活動を取り入れる。</p>				
	<p>【授業を展開するための問い】<u>明治時代の条約改正交渉の特徴とはどのようなものか。</u></p> <p>②教科書を活用して用語の正確な理解を行う。</p> <p>③本時の問いに対してワークシートの解答を記入する。</p>	●			<p>・既習事項を踏まえた上で、問いに解答できている。(ワークシート)</p>
第3時	<p>【ねらい】当時の国民目線で歴史事項を考察させる。</p>				
	<p>【本時の問い】福沢諭吉「脱亜論」へ返信の手紙を書いてみよう。</p>				
	<p>【具体的方策3】ループリックに照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>福沢諭吉の「脱亜論」とはどのようなものか。</u></p> <p>①教科書を活用して用語の正確な理解を行う。</p> <p>②本時の問いに対してワークシートの解答を記入する。</p>	●			<p>・既習事項や地理的条件や世界史と関連付け、作成できている。(ワークシート)</p>
第4時	<p>【ねらい】日清戦争発生の原因について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら理解する。</p>				
	<p>【本時の問い】なぜ、日清戦争は発生したのか。</p>				
	<p>【具体的方策3】ループリックに照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>日清戦争の歴史的意義とはどのようなものか。</u></p> <p>①遼東半島等の位置を白紙に記入し当時の世界情勢を理解する。</p> <p>②本時の問いに対してワークシートの解答を記入する。</p>	●			<p>・地図を作成し、世界情勢を理解し、世界の中の日本という感覚をもつことができる。(活動観察)</p>
第5時	<p>【ねらい】日清戦争の結果と影響について理解する。</p>				
	<p>【本時の問い】もし、日本が日清戦争に勝利していなかったら現在の日本はどのようなになっているだろうか。</p>				
	<p>【具体的方策2】「単元を貫く問い」に対し、社会において見られる課題や身近な事象とを結び付けて考えさせる活動を取り入れる。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>日清戦争が国内外に与えた影響とはどのようなものか。</u></p> <p>①本時の問いに対して解答する。</p> <p>②単元を貫く大きな問いに対して解答する。</p> <p>③他の生徒と意見を交換する。</p>	●			<p>・本時の問いについて、日清戦争の影響を踏まえながら答える。(ワークシート)</p> <p>・授業を踏まえて、他の</p>

	④授業内容を踏まえて、新たな問いを考察する。			生徒の意見を踏まえながら自分の意見をよりよいものにしている。 (ワークシート)
--	------------------------	--	--	--

(5) 本時(全5時間中の5時間目)

ア 本時の目標

日清戦争の結果とその影響について理解する学習を通して、帝国主義政策の特徴、列強間の関係の変容、日本の産業革命、条約改正などの歴史事項を、多面的・多角的に考察し表現することにより、理解を深めることができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 前単元の「自由民権運動と大日本帝国憲法の制定」では、まとまりをもたせながら授業を行うことは達成できたが、生徒自身が新たな資料を作成する試みや対話的学習は不十分であった。本単元では、新たな資料作成の時間を多く設定し、対話的な学習も授業内に取り入れることにより、生徒の表現力を高める。

(イ) 前単元「自由民権運動と大日本帝国憲法の制定」におけるワークシートの記述を分析した結果、生徒は新たな問いを立てる際に、現在の日本国憲法について興味・関心をもつことができている。本時においても、社会との関連から歴史事項を考えさせる活動を取り入れる。これにより、よりよい社会の実現に向け課題を主体的に追究することができるようになる。

(ウ) 前単元「自由民権運動と大日本帝国憲法の制定」では、資料を読み取る活動は取り入れたが、新たな史資料を作る作業は行わなかった。本単元では、福沢諭吉「脱亜論」に対しての返信を行わせる活動や白紙に地図を一から作成させる活動を取り入れた。これにより、史資料をより深く活用することができるようになり、学習に対する意欲が高まる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<p>【授業を展開するための問い】この風刺画(ビゴー「鉄道遊び」)を見て、吹き出しにセリフを入れてみよう。</p> <p>【予想される生徒の反応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本が輪の中に入りたがっている等 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいを周知する。 	
展開 23分	<p>【授業を展開するための問い】もし、日清戦争で日本が敗北していたら現在の日本はどのようになっているだろうか。</p> <p>【予想される生徒の反応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・列強の植民地になっていたかもしれない等 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者の一方的な講義にならないように、授業者と生徒との対話を増やす。 ・日本の領土問題の重要性について触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書だけではなく、授業者の発問や会話などもメモに取ることがで

			きている。(ワークシート)
ま と 22 分	<p>①本時の問いに対しての解答をする。もし負けていたら、現在の日本がどうなっていたであろうかという視点を踏まえさせながら記述する。</p> <p>②単元を貫く問いについて本単元で学習した内容を用いて解答する。</p> <p>③記入した生徒は隣の席の生徒に対し意見を述べる。</p> <p>④単元を貫く問いや隣の生徒との意見交換を踏まえて、新たな問いを考察し、文章や構造図などで表現する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・記述内容の根拠は学習事項を活用するように指導する。 ・文章記述だけではなく、構造図や絵による解答も可とする。 ・本単元の学習事項を活用して解答することを意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・隣の生徒の意見を踏まえ、よりよい解答や問いを生み出せている。(ワークシート)

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

- (ア) 仮説1「学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項を関連付けた話し合い活動を取り入れることにより～になるだろう」については、表5のとおり、前単元よりも本単元の方がA段階の生徒の割合が37%から51%と増加している。単元ワークシートの導入や既習事項との関連付けを授業に取り組んだ結果、仮説1はおおむね達成できたと考える。

表5 ルーブリック1「知識を活用すること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	37%	26%	30%	7%
本単元	51%	22%	22%	5%

- (イ) 仮説2「学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより～になるだろう」については、表6や授業の成果物の記述事項を分析した結果、生徒は歴史事項を過去の出来事として捉えるのではなく、現在とのつながりも意識できるようになった。そして、生徒が立てた新たな問いの中には「今、貴族院があったらどうなっているのだろうか。」といった、現在を意識した問いを立てる生徒がいたことから、生徒の記述の内容からも現在を意識したことが分かる。

表6 ルーブリック2「社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	19%	52%	22%	7%
本単元	35%	49%	12%	4%

- (ウ) 仮説3「ルーブリックを事前に提示することによって～になるだろう」については、本単元では、生徒が新たな史資料を作成する取組を行った。本単元の第3時における「脱亜論への返信の手紙を書いてみよう」という問いに対する生徒の成果物を分析した。表7の結果より、新たな史資料作成の試みとしてはおおむね達成したと考えられる。一方で新たに作成した資料を「深く活用する」というところまでは至らなかったため、今後は新たに

作成した史資料を基に議論するなどの活動を授業内に盛り込むことが必要だと考える。

表7 ルーブリック3「史資料のより深い活用を図ること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	7%	43%	31%	19%
本単元	29%	44%	22%	5%

イ 成果と課題

(ア) 成果

授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けて考察する活動を取り入れたことにより、背景や因果関係をワークシートに自分の言葉で表現することができるようになった。また、提示された「単元を貫く大きな問い」に対し、社会に見られる課題や身近な事象と結び付けて考えさせる活動を取り入れることにより、過去の歴史事項を学びながら、現在の諸問題に意識を向けさせることができるようになった。

(イ) 課題

史資料を十分に活用することやペアワークを効果的に取り入れることができなかつたため、生徒の学習意欲の向上に結び付けることができなかつた。生徒は単元のワークシートの有用性には気付いているものの自分の言葉で表現することに苦手意識をもち、敬遠していることも分かった。また、このように敬遠している生徒たちに対して、課題が明確になるため個別の指導がしやすくなったと言える。

4 実践事例Ⅲ 地理

教科名	地理歴史	科目名	地理A	学年	第1学年
-----	------	-----	-----	----	------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

- ア 単元名 熱帯・乾燥帯の特徴と人々の生活
- イ 使用教材 「地理A」東京書籍
「新詳高等地図」帝国書院
「最新地理図表 GEO」第一学習社

(2) 単元(題材)の指導目標

諸資料を活用して気候区の特徴を理解し、地球規模の大気の有様が、どのように人々の生活に影響しているかを考察することができる。

(3) 単元の評価基準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
各気候区の特徴を理解し、その影響についての知識を身に付けている。	各気候区について、その成因を既習事項と関連付けながら考察し表現している。	単元の問いを積極的に追求し、社会にみられる課題と関連付けようとしている。

(4) 単元指導計画と評価計画（2時間扱い）

時間	学習内容・学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【単元を貫く大きな問い】 大気循環は、人々の生活にどのような影響を与えているだろうか。				
第1時	【ねらい】 気候の特徴の捉え方を理解し、地域特有の課題について、歴史的な背景と結び付けて考えさせる。				
	【本時の問い】 熱帯の気候と生活はどのようなもので、どんな問題を抱えているだろうか。				
	【具体的方策3】 ルーブリックに照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。				
	<p>【授業を展開するための問い】 <u>提示された図をどのように読み取るべきか。</u></p> <p>①数値データからハイサーグラフを作成する。</p>		●		<p>・ワークシートに自分なりの考えをまとめることができる。(活動観察)</p>
【具体的方策2】 「単元を貫く問い」に対し、社会において見られる課題と身近な事象とを結び付けて考えさせる活動を取り入れる。					
	<p>【授業を展開するための問い】 <u>熱帯気候の生活はどのようなものか。</u></p> <p>②熱帯の気候の影響を理解し、地域の課題について考え、意見を発表し、本時の問いについて解答する。</p>				<p>・既習事項を踏まえた上で、問いに解答できている。(ワークシート)</p>
第2時	【ねらい】 地球規模の大気循環が、気候区の形成に影響していることを理解させる。				
	【本時の問い】 なぜ砂漠が形成され、サバナ気候やステップ気候には雨季と乾季ができるのか。				
	<p>【授業を展開するための問い】 <u>乾燥気候の生活はどのようなものか。</u></p> <p>①乾燥帯の雨温図を読み取り、言語化させる。</p> <p>②景観に関する画像資料を見て、それらが気候にどういった影響を受けているものかを考える。</p>		●		<p>・既習事項と結び付けながら、ワークシートに表現することができる。(活動観察)</p>
	【具体的方策1】 授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けて考察させる活動を取り入れる。				
	<p>【授業を展開するための問い】 <u>サハラ砂漠はどのように形成されたのだろうか。</u></p> <p>【授業を展開するための問い】 <u>ステップ気候に短い雨季が存在する理由を説明してみよう。</u></p> <p>③赤道低圧帯等が地軸の傾きの影響と気候区形成とのつながりを資料にまとめる。</p> <p>④中緯度高圧帯から外れているパタゴニアが砂漠になっている理由を考えさせ、発表する。</p>				<p>・既習事項を踏まえた上で、問いに解答できている。(ワークシート)</p>

(5) 本時(全2時間中の2時間目)

ア 本時の目標

低緯度から中緯度地方の気候区形成に、既習事項の大気大循環が影響していることを考察し表現することにより、理解を深めることができる。また、他地域を多面的・多角的に捉えることで、より理解を深めることができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 前単元ではケッペンの気候区分に基本的な理念について、既習内容の大気大循環を確認しながら授業を進めて、グラフの作成をするなど資料作成をすることはできた。しかし、それらを利用した対話的な活動を取り入れることが十分にできなかった。そこで本単元では、学んだ内容を現代的な課題とどのように結び付けているのかを協働的に思考する活動を取り入れることにした。本時の学習内容「乾燥帯の形成」について、既習事項「降水発生のメカニズム」と関連付ける時間を取り入れた。このことを通して事象を概念化し、類似する現象などについて表現する力を育成する。
- (イ) 前単元では、大気大循環を中心とした風について学習した。季節風の発生メカニズムと義務教育で学んだ日本の気候の特徴を結び付けることで、生徒の理解度を深めることができた。しかし、基礎理論を扱う単元であったため、社会に見られる課題との結び付けが十分にできなかった。本単元においては、気候区の学習とともに、そこに住む人々の生活を扱う。これにより、よりよい社会の実現に向け課題を主体的に追究することができる。
- (ウ) 前単元では、資料を読み取る活動は取り入れたが、新たな資料を作る作業は行わなかった。そこで本単元では、元となるデータからハイサーグラフを作成させることや、気候区と大気に関連を作図させることにより、資料をより深く活用することができるようになり、学習への意欲が高まる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 15分	①本時の問いを単元シートに記入する。 ②乾燥帯の雨温図(砂漠気候・ステップ気候)を提示し、その特徴を言語化させる。指名した生徒に発表する。 ③乾燥帯に関する資料を提示、乾燥帯の気候景観について関心をもつ。	・前時に扱った技能を確認し、誤りがあれば修正する。	
	【授業を展開するための問い】サハラ砂漠はどのように形成されたのだろうか。 【予想される生徒の反応】 ・気候変動 ・人間による環境破壊、等	・生徒との対話をしながら、高圧帯、大気大循環と結び付けさせる。	

展 開 30 分	【授業を展開するための問い】ステップ気候に短い雨季が存在する理由を説明してみよう。		
	【予想される生徒の反応】 ・季節風の影響を受ける。 ・上昇気流が何らかで発生する、等 ①ワークシートを利用して、大気の平行移動と気候区の関係についてまとめる。	・授業者と生徒で対話をしながら答えを引き出し、板書していく。	
ま と め 5 分	【授業を展開するための問い】 パタゴニアはなぜ砂漠気候になるのだろうか。 ②ペアワークで考えさせて発表させる。 【予想される生徒の反応】 ・上昇気流が発生しないから。 ・大気が安定しているから、等	・パタゴニアが中緯度高圧帯の影響以外で乾燥していることに着目させてから、地図帳や既習プリントを利用して考えさせる。	・隣の生徒の意見を踏まえ、より良い解答や問いを生み出せている。(ワークシート)
	①ワークシートに、本時の問いに対する解答を行う。	・記述する内容は学習事項などを根拠として、活用するように告知する。	・学習内容を踏まえ、より良い解答や問いを生み出せている。(ワークシート)

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

- (ア) 仮説1「学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項を関連付けた話し合い活動を取り入れることにより～になるだろう」については、表8の結果や単元ワークシートの導入や既習事項との関連付けを意識させながら授業に取り組んだ結果より、A・B段階の生徒が約7割を占めており概ね達成できた。前単元に学習した大気大循環を利用した、単元を貫く問いだったが、大気大循環のこういった部分が、熱帯や乾燥帯の形成に影響しているかを表現できているかを高評価としたが、「大気大循環」という単語だけをそのまま利用している生徒は少なく、前単元と関連付けながら記述している解答が多く見受けられた。

表8 ルーブリック1「知識を活用すること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	41%	28%	31%	0%

- (イ) 仮説2「学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより～になるだろう」については、表9の結果から、A・B段階の生徒が9割を占めており達成できた。また、成果物を分析した結果、自然環境と人々との関わりを、遠い場所の出来事として捉えるのではなく、身近な地域や自分たちの生きていく世界

とのつながりも意識できるようになったことが分かった。また、生徒が新たに作った問いの中には、次単元以降の学習内容や、現代世界の諸課題の解決につなげて考えるものが数多く見受けられた。

表9 ルーブリック2「社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	31%	59%	8%	2%

- (ウ) 仮説3「ルーブリックを事前に提示することによって～になるだろう」については、表10の結果から、A・B段階の生徒が6割以上を占めており概ね達成できた。気候データを利用したハイサーグラフの作成と、赤道低圧帯や中緯度高圧帯の南北移動に伴う雨季乾季の出現などをまとめた表の作成をおこなったが、生徒の様子を観察していると、各問いに対する回答を記述するときに、それらの作成物や地図帳などをかなり参照していた。授業者から見ると、資料の読み取りや要約など、十分な利活用ができていたように見受けられたが、生徒にとっては一体何を史資料として判断していいのかという解釈ができていない可能性がある。今後、単元シートの返却時などの機会を通して更なる指導をしていく必要がある。

表10 ルーブリック3「史資料のより深い活用を図ること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
評価	18%	45%	34%	3%

イ 成果と課題

(ア) 成果

地球規模の大気現象が、気候区の形成や人々の生活にどのように影響しているのかを単元シートに自分の言葉で表現することができた。特に、授業内で扱った具体的な内容から、抽象的な問いに対しても、積極的に自分もっているイメージを表現しようとする姿勢が見られた。正しい答えを求める傾向のあった生徒たちに変容がみられ、まずは自分もっているイメージを具体化し、表現しようとする姿勢につながっていると考えられる。これらを継続し、科目のポートフォリオとして蓄積できれば、高い学習効果が期待できる。

(イ) 課題

生徒たちが生み出した「新たな問い」に対して、共有できるような仕掛けが必要である。また、新学習指導要領の趣旨を踏まえて、「新たな問い」を生かした「深い学び」を探究できるような機会を設ける必要がある。

5 実践事例Ⅳ 「江戸から東京へ」

教科名	地理歴史	科目名	江戸から東京へ	学年	第2～4学年
-----	------	-----	---------	----	--------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

- ア 単元名 初期の外交政策と条約改正
 イ 使用教材 「江戸から東京へ」(東京都教育委員会)

(2) 単元(題材)の指導目標

日本が条約改正を達成することができた理由を、諸資料を活用して、国際情勢に着目しながら、地理的・歴史的な見方・考え方を働かせて考察することができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
日本が条約改正を達成することができた理由について理解し、その知識を身に付けている。	日本が条約改正を達成することができた理由について、多面的・多角的に考察し、表現している。	日本が条約改正を達成することができた理由について、意欲的に追究している。

(4) 単元指導計画と評価計画 (2時間扱い)

時間	学習内容・学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【単元を貫く大きな問い】なぜ日本は条約改正を達成することができたのか。				
	【ねらい】風刺画やその他の資料から、鹿鳴館に象徴される欧化政策が外交政策の基本となった理由について考察させる。				
	【本時の問い】なぜ日本政府は、鹿鳴館で毎晩舞踏会を開いたのか。				
	【具体的方策3】ループリックに照らし合わせながら、自ら史資料を探し出したり、作成したりする活動を取り入れる。				
第1時	<p>【授業を展開するための問い】<u>条約改正に至るまでに、どのような出来事があったのだろうか。</u></p> <p>①ワークシートに示されたループリックについて確認する。</p> <p>②教科書、資料集を参考に年表を作成する。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>政府が鹿鳴館を建築し、毎晩舞踏会を開いたことについて、欧米からどのように見られていたのだろうか。</u></p> <p>③教科書の風刺画から鹿鳴館時代の歴史的意義について考察する。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>ノルマントン号事件とはどのような事件だったか。</u></p> <p>④ノルマントン号事件の歴史的意義について、教科書や諸資料を踏まえて理解する。</p>	●			・資料を作成する活動を通して、明治時代の外交の大きな流れを理解し、その知識を身に付けている。(ワークシート、活動観察)
第2時	<p>【ねらい】領事裁判権撤廃と関税自主権の回復について、国際情勢に着目しながら考察させる。</p> <p>【本時の問い】なぜイギリスは日本との条約改正のきっかけをつくったのか。また、日本が条約改正を達成した要因は何か。</p> <p>【具体的方策1】授業内で、学習内容について類似・差異、因果関係などに着目して関連付けて考察させる活動を取り入れる。</p> <p>【授業を展開するための問い】<u>1894年、日本がイギリス</u></p>		●		・イギリスが日本

<p>と結んだ日英通商航海条約とは、どのような内容だったのか。</p> <p>【授業を展開するための問い】イギリスはなぜ1894年に領事裁判権の廃止に同意したのか。</p> <p>①諸資料から個人で考察し、その後、グループに分かれて、考察した内容をまとめる。</p> <p>【授業を展開するための問い】ここまでどのような出来事があって、日本が強国だと欧米が感じたのか。</p> <p>②1911年に日本の条約改正が達成された背景には、どのようなことがあったか追究する。</p>			<p>との条約改正に向けて動き出した背景を、多面的・多角的に考察し、表現している。(ワークシート、活動観察)</p>
<p>【具体的方策2】「単元を貫く問い」に対し、社会において見られる課題と身近な事象とを結び付けて考えさせる活動を取り入れる。</p>			
<p>③ワークシートに疑問に感じたことを記入する。</p>			<p>・新たな問いを意欲的に追究している。(ワークシート)</p>

(5) 本時(全2時間中の2時間目)

ア 本時の目標

イギリスがいち早く日本との条約改正のきっかけをつくり、日清・日露両戦争を経て1911年に条約改正を達成することができた理由を、諸資料を用い、国際情勢に着目しながら多面的・多角的に考察することができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 前単元では、「自由民権運動と大日本帝国憲法の制定」に関して、流れを追う内容に終始してしまった。そこで本単元では、本時の学習内容「1894年に日英通商航海条約が締結され日本にとって不平等条約撤廃の契機となり、日清・日露両戦争を経て1911年に条約改正を達成したこと」を、既習事項「当時の英露の対立関係」と関連付ける作業を取り入れた。このことを通して事象を概念化し、因果関係などについて対話的な活動の中で表現することができる。
- (イ) 前単元では、「なぜ」を説明することによりあまり重点を置いておらず、単純に歴史上の出来事を「自分の言葉で」説明できるか、ということにのみ重点を置いてしまった。一方それぞれの出来事の関連性が見えにくいため、生徒の興味関心を高めることは難しい。当時の日本と諸外国との関係、また諸外国間の関係について表現した上で新たな問いを生み出すことにより、よりよい社会の実現に向け課題を主体的に追究することができる。
- (ウ) 前単元では、資料を読み取る活動は取り入れたが、新たな資料を作る作業は行わなかった。本単元では、プリントに提示されていない史資料を教科書や資料集などから探したり要約したり、新たな資料を作り出す活動を取り入れた。これにより、史資料をより深く活用することができるようになり、学習に対する意欲を高める。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	①単元を貫く大きな問い「なぜ日本は条約改正を達成することができたのか」を確認する。	・本時のねらいを周知し、グループワークを行うことを伝える。	
	【授業を展開するための問い】1894年、日本がイギリスと結んだ日英通商航海条約とは、どのような内容であるか。		
展開 35分	【予想される生徒の反応】 ・平等になるための条約 ・領事裁判権の廃止等		
	【授業を展開するための問い】イギリスはなぜ1894年に領事裁判権の廃止に同意したのか。		
	①「なぜイギリスがいち早く日本との条約改正のきっかけをつくり、その後日本は1911年に条約改正を達成することができたのか」という本時の問いのうち、イギリスがいち早く日本との条約改正に踏み切った理由を個人で考察する。その後、グループごとに意見を発表する。 【予想される生徒の反応】 ・ロシアに対抗するため ・日本が強い国だと感じたから等	・教科書と既習事項である明治の初期外交のワークシートを参考にするよう伝える。	・イギリスが日本との条約改正にむけて動き出した背景を、多面的・多角的に考察し、表現している。(ワークシート、活動観察)
まとめ 10分	【授業を展開するための問い】ここまでどのような出来事があった、日本が強国だと欧米が感じたのか。		
	【予想される生徒の反応】 ・日清戦争や日露戦争で日本が勝ったから ・イギリスを味方につけたいと考えたから等		
まとめ 10分	①ワークシートに、単元を貫く問い「なぜ日本は条約改正を達成することができたのか？」について諸資料を活用して、国際情勢に着目しながら解答を記入する。また、ワークシート「疑問に思ったこと」に新たな問いを記入する。	・イギリスとロシアという二大国の関係で外交が動いたことから、当時の英露関係と、現在の米露、米中関係との類似などに着目させる。	・年表など諸資料をもとに、新たな問いを意欲的に追究している。(ワークシート)

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

- (ア) 仮説1「学びの過程の中に、新たな学習内容と既習事項を関連付けた話し合い活動を取り入れることにより～になるだろう」については、表11からほとんどの生徒が達成していることがわかる。また、成果物を分析したところ、教科書や資料集、ノートを活用し、新たな学習内容と既習事項と結び付けた記述が増加し、内容も洗練されてきた。

表11 ルーブリック1「知識を活用すること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	65%	26%	9%	0%
本単元	77%	17%	6%	0%

- (イ) 仮説2「学習内容の意味や意義を正確に理解した上で、社会に見られる課題と結び付けて考えることにより～になるだろう」については、表12にもあるように、単元を追うごとに9%から11%へとD段階の生徒が増えるなど授業のねらいを浸透させることが難しかった。授業の目的を十分に説明した上で、生徒への指導を粘り強く継続する必要がある。

表12 ルーブリック2「社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	29%	62%	0%	9%
本単元	24%	65%	0%	11%

- (ウ) 仮説3「ルーブリックを事前に提示することによって～になるだろう」については、表13より、C・Dの生徒が合わせて3割近くを占めるように、ただの史資料作成にとどまり、「より深く」活用することには結び付かなかったことを表している。年度当初から年間指導計画に組み込み、探究活動を継続することにより思考力を高める必要がある。

表13 ルーブリック3「史資料のより深い活用を図ること」について

	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)	D (改善を要する)
前単元	30%	39%	21%	10%
本単元	30%	45%	19%	6%

イ 成果と課題

(ア) 成果

表14のとおり、授業後にアンケートを行ったところ、「『ワークシート』の導入により、授業への意欲が高まったか」という項目について、「とてもある」「少しある」と答えた生徒は62%となり、概ね生徒は学びの見通しを立てた上で、史資料をより深く活用することができるようになり、学習に対する意欲を高めることができたことを成果として挙げる。

表14 アンケート「『ワークシート』の導入により、授業への意欲が高まったか。」

	はい	どちらかというとはい	どちらかというといいえ	いいえ
評価	38%	31%	31%	0%

(イ) 課題

学習内容を社会にみられる課題と結び付けることの難しさには、改めて気付かされた。

教員側で生徒に答えを示すことは簡単であるが、あくまで生徒が自分自身で考えて、現在の問題と結び付けることが大切である。生徒の作業時間を十分に確保できるように、年間指導計画に入れ、計画的に実施する必要がある。

VI 研究の成果

本研究においては、様々な成果が見られたので、「Ⅱ 研究の視点」に基づいて示す。

1 知識を活用すること

学習内容を既習事項と結び付けて考え自分の言葉で表現しようとする姿勢が身に付いた。与えられた問いについて思考し表現することで、学習内容に対してどれだけ理解が深まったのか生徒自身が自己の到達度を理解することにもつながった。また、実力のある生徒が他の生徒へ理解したことを伝えるなど、学びに向かう力の育成にも効果があったと考えられる。

2 社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと

現代の諸課題に関して生徒が主体的に考察する姿が見られた。ニュースや新聞などで得た情報を活用しながら、単元で学習した内容と社会に見られる問題とを関連付けながら新たな問いを生み出した。

3 史資料のより深い活用を図ること

多面的・多角的に問いについて思考するために年表の作成や白地図への書き込み、ハイサーグラフの作成などを行った。ループリックを事前に提示したことにより、様々な資料を活用しながら新たな資料を生み出すための活動に意欲的に取り組んだ。教員の授業改善の側面から、「単元を貫く大きな問い」を設定することによって、単元の中での1時間の授業が果たす役割（単元を見据えた授業構成）が定まったことも成果として挙げられる。単元のワークシートを活用したことにより、各時間の授業での生徒の変容を見取ることができるようになったことだけでなく、ループリック評価によって単元として適切な評価をすることができるようになった。指導の成果を十分に得られない生徒も一定数いるが、評価をしやすくなったことによって個別指導などを活用しフォローすることもできる。

VII 今後の課題

本研究においては、いくつかの課題が見られたので、「Ⅱ 研究の視点」に基づいて示す。

1 知識を活用すること

カリキュラムマネジメントの観点からより深い研究が必要である。教科・科目横断的な内容については今後更に追究する必要がある。加えて、本研究では対話的な活動についての具体的な研究が不十分であった。ペア学習やグループ作業、ジグソー法などの様々な実践について、授業内容に対しどのような活動が適切であるかを研究する必要がある。その際、ICTを活用し成果物を相互に見て、意見を伝え合う機会を設けることがグループでの討論や話し合い活動の代替として期待できる。

2 社会と結び付けて新たな問いを生み出すこと

特に新たな問いを生み出すことに様々な課題が生じた。

第一に「単元を貫く大きな問い」という文言が生徒にとって伝わりにくいものであった。生徒に示す際には趣旨が十分に伝わるものにする必要がある。各授業について、常に授業の目標を問いの形式で生徒に提示する必要性の有無や生徒の自己評価についての課題がみられた。生徒の自己評価については、実態との整合性がつかみにくく、その方法についての研究が必要である。また自己評価を行うタイミングについても、各授業なのか各単元なのか、時間的制約との関連を踏まえながら考える必要がある。

第二に社会において見られる課題や身近な事象と結び付ける活動についても、生徒の活動に対して授業者がどれだけ関わるのか、特に内容の示唆をどの程度すべきなのかという点に課題が残った。この「単元を貫く大きな問い」を用いた生徒の活動に関してはワークシートを作成して検証を行った。このワークシートについても、細かい文言や形式、評価の方法について課題が残った。とりわけ評価については、日々の教育活動の中で現実的な方法について課題が残っている。本研究では、生徒の記述内容について概要を把握する中で、必要性を感じた生徒に個別指導をするという方策を考えた。生徒の意欲につなげるためにも、効果的な評価についての研究を要する。生徒の意欲喚起という観点について、アンケート結果から効果を感じる生徒もいる一方で、やる気が下がった生徒もいた。これは、年度の途中で授業方式を変更し、単元のワークシートを使用したため、生徒にとって不慣れな学習活動となり意欲が低下した生徒もいたと考えられる。年度当初より継続して使用することである程度の改善が期待できる。

3 史資料のより深い活用を図ること

授業準備の段階で生徒の使用する史資料を精選して提示することで、より深い活用が期待できる。さらに新たな史資料の作成についてはきわめて困難であるということが明らかになった。授業内容や目標によっても期待する程度は異なるが、どのようにして史資料の作成を実現し、期待する成果に結び付けるか、という点に対する研究が必要である。加えて、このような学習活動を生徒の意欲喚起へと結び付けるための工夫が必要である。

平成 30 年度 教育研究員名簿

高等学校・地理歴史

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立六本木高等学校	主任教諭	平 田 正 樹
東京都立日本橋高等学校	教 諭	玉 腰 隆 幸
東京都立田園調布高等学校	教 諭	内 野 俊 和
東京都立豊島高等学校	主任教諭	◎澤 木 考 耶
東京都立稔ヶ丘高等学校	教 諭	星 谷 逸 希
東京都立立川国際中等教育学校	教 諭	山 本 葉 月

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 南濱 隆宏

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・地理歴史

東京都教育委員会印刷物登録
平成 30 年度 第 135 号

平成 31 年 3 月発行

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社